

Title	韓国におけるモルトマン受容とその理解(第二回日韓神学会議)
Author(s)	申, 玉秀 洛, 雲海・訳
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.55, 2013.3 : 82-113
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=4690
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

韓国におけるモルトマン受容とその理解

申 玉 秀

洛雲海・訳

I. はじめに

二一世紀、現存する最も偉大な組織神学者の一人ユルゲン・モルトマン (J. Moltmann, 1926-現在) は、テュービンゲン大学教授として在職し、すでに引退したが、その後も最近に至るまで旺盛な研究および著述活動を拡大しつつある。彼は六〇年余にわたり、自らの神学的作業を通してドイツのみならずヨーロッパや英米圏、さらにはアジアやアフリカなどの第三世界の教会ならびに神学に対して持続的に神学的洞察力を提供し、神学の方角を先導的に提示してきた。

モルトマンは、その神学的旅程の中で多様な神学的関心と主題を扱っており、少なからぬ神学思想の変遷過程の中にあって、非常に豊かな神学的諸成果を収めた。彼の諸著作は組織神学の重要な主題の数々を扱っているが、伝統と現代思想ならびに福音と状況の対話を基礎として一つの統全的「汎注：holistic」理解と接近を見せている。彼が提示した独特な代案的思考と画期的な神学的地平は新しい話の糸口となり、時として熱き神学論争の中心に置かれることがあつ

たし、活発な神学的討議の流れを形成する役割を果たすこともあった。モルトマンが世界の神学界に投げかけた話の糸口は、彼が自らの身を置いたドイツだけでなく、全世界的 (global) な時代状況を反映したものである。彼は常に時代的な問いに対する問題解決という神学的課題 (problem-solving task) を忠実に遂行してきた。彼は時代を貫く目をもつて、その代案を真摯に模索する神学的作業を続け、それを通して韓国の教会と神学界に対しては一〇年ないし一五年は先立つような、まさに慧眼を開いてくれる先駆的立場を提示したのである。

本稿は、モルトマンが韓国においてどのように受容され、また理解されてきたかを分析し評価するための研究をしようとするものである。われわれはまず、韓国で展開されたモルトマンに関する紹介と研究を歴史的に考察し、次にモルトマンと韓国の教会ならびに韓国神学との交流ならびに対話の内容とその仕方を分析した後に、最近までモルトマンの神学思想が韓国の神学者たちと韓国の神学形成に対してどのように受容され、また理解されてきたかということについて具体的に探って見ていくこととする。そして結論において、モルトマンが韓国の教会とその神学に与えた影響を評価し、未来に対する方向性を展望しようとするものである。

II. モルトマンと韓国教会ならびに韓国神学

モルトマンは、著書『希望の神学』(一九六四)が出版されて以来、世界の神学界から注目され始め、韓国においてもただちにその思想が活発に紹介され始めた。彼は一九六〇―七〇年代に韓国神学大学(現韓神大学校、基督教長老会)や民衆神学者たちによって紹介され、その神学は一九八〇年代以後、延世大学校と長老会神学大学校(大韓イエス教長老会(統合))、監理教神学大学校(基督教大韓監理会)、ソウル神学大学校(基督教大韓清浄教会)などの主要な

教団立神学校において重点的に扱われつつある。最近に至っては、モルトマンは教派を超えて広範囲な仕方で紹介されており、モルトマン神学に関する研究が徐々に深められつつある。

1. モルトマンに関する紹介ならびにモルトマンの著書の翻訳作業

韓国語に翻訳されたモルトマンの著書は全部で三一冊に及ぶ⁽¹⁾。時として、それらは外国語に翻訳された最初の本となることもあったし、また原著と同時に訳書が出版されたり、同時期に翻訳されて原著に一年ほど遅れて出版されるようなこともあった⁽²⁾。しかし、訳書の中にはドイツ語本から直接翻訳されたために、英訳本に比べて用語や論理がより明確に理解でき、また明確に表現された長所を持っている場合もある。モルトマン神学が韓国で受容され理解される過程において最も決定的であった要因は、何よりもこのような迅速かつ正確な翻訳作業にあると筆者は考えている。代表的な翻訳家としては、全景淵^{ジョンキョンヨ}（七冊）、金均鎮^{キムキョジン}（二〇冊）、李信建^{イシンゴン}（五冊）、郭鍾垣^{クァクヘウオン}（四冊）などを挙げることができるが、特にモルトマンの弟子たちによる完成度の高い翻訳がモルトマン神学を大衆化させることに寄与したものと考えられる。したがって、モルトマンは、現今のどの世界的神学者に比べても韓国の牧会者および神学者たちにとって最も接しやすい条件と環境に置かれている神学者と言えるのである。

韓国の主要な神学雑誌である『基督教思想』ならびに『神學思想』は、その草創期よりモルトマンの諸論文を翻訳掲載してきており、モルトマンに関する多数の研究論文ならびにモルトマンとの対談を掲載することによって、モルトマン神学を韓国教会と韓国神学界に紹介することに大きく寄与した⁽³⁾。韓国で最も早くモルトマン神学に注目し、モルトマンを紹介した学者たちは、基督教長老会に所属する朴鳳琅^{パクボングラン}、全景淵、金均鎮などである。彼らは、主としてカール・バルト（K. Barth）を中心とした新正統主義神学を好み、これを韓国に紹介発展させた学者として、韓国神学が世界の神

学の流れに乗るための足場を築いたという評価を受けている。⁽⁴⁾一九七三年、全景淵と朴鳳琅によつてモルトマンの著書『希望の神学』が翻訳出版されることによつて、韓国ではモルトマン神学についての本格的な紹介と大衆化が可能となった。

それ以後、韓国においてモルトマンを紹介し、モルトマン神学を受容する動きは主として彼の弟子たちによつて行われた。モルトマンから博士論文の指導を受けた韓国入学者は九名にのぼり、彼らは韓国有数の神学大学や教会において中枢的な役割を担っている。⁽⁵⁾彼らはモルトマンの諸著書を翻訳することをもつて、韓国の教会と神学界にモルトマン神学を紹介する働きの先頭に立ってきた。何よりも、彼らの神学思想の中にモルトマンの影響が顕著に場を占めているという事実を、われわれは至るところで確認することができる。

二〇〇〇年代以後は、韓国のほぼ全ての神学大学においてモルトマン神学が多様な仕方を取り扱われてきた。もちろんモルトマン神学に対する肯定的な立場と否定的な評価が共存してはいるし、モルトマンについての少なからぬ誤解や歪曲があることも否定することはできない。しかし、モルトマンの思想が活発な神学的討議の対象となつていて、点については誰も異論の余地はないであろう。韓国において、モルトマンは二〇世紀後半の世界の神学的潮流を主導した代表的な現代神学者として頻繁に紹介されており、⁽⁶⁾現在では長老会神学大学校ならびにソウル神学大学校において「モルトマン神学」(神学大学院〈M.Div〉課程)あるいは「モルトマンセミナー」(大学院〈Th.M〉課程)などの講座が開設され、その思想が集中的に研究されている状況にある。

2. モルトマンに関する研究論文ならびに諸著書

モルトマンに関する博士論文は、全世界において二〇〇余編を超えているが、そのうち韓国人によつて書かれた論文

は八編とそれほど多いとは言えない。しかし、モルトマン神学は韓国で広範囲に研究されており、そのことは修士・博士論文において確認することができる。韓国においてモルトマン神学を主題とした論文は、一九六九年から二〇一二年までで約三三二編に達しており、その神学は聖公会大学校およびカトリック大学校を含め、教派を超えるようにしてほぼ大部分の神学大学校で扱われてきた。それらは主として長老会神学大学校（二〇一編）、延世大学校（六六編）、韓神大学校（三八編）、監神大学校（一九編）、牧園大学校（一八編）、ソウル神学大学校（一五編）などの諸大学校において発刊されてきたが、保守的陣営に属する総神大学校（六編）、高神大学校（三編）、ウェストミンスター神学大学校（二編）などの諸大学校においても扱われていることから、神学的に保守・進歩を問わずモルトマン神学が非常に包括的な研究対象となってきたということをわれわれは確認することができる。しかし、一九七〇年代は八編、一九八〇年代は三〇編、一九九〇年代は一二編、二〇〇〇年代以後が一八二編刊行されており、モルトマン神学についての研究が徐々に拡大されてきており、またその主題も多様化かつ専門化してきていると言える。主題別に見ると、モルトマンの教会論（五七編）、終末論（四八編）、聖霊論（四三編）、三位一体論（三八編）、生態学的神学（二二編）、希望の神学（二二編）、十字架の神学（二二編）などが扱われている。

最近の諸論文を調べてみると、モルトマン神学をただ理論的に分析し評価することにとどまらず、韓国社会と韓国教会にいかにも実践的にこれを適用することができるかということを模索する内容が多く含まれている。このことは、非常に鼓舞的な現象と見なさないではいられない。というのも、モルトマン神学を無批判的に受容し、これをオウム返しのように反復するのではなく、今日の韓国教会や韓国社会のために責任的な応答を提供する神学として、もう一歩進み出る段階となっているためである。

またモルトマンに関する著書としては、歴史神学者として長老会神学大学校の名誉教授である李亨基教授が、モルトマン神学を抜粋要約して著述した『알기 쉽게 간주린 모르트만 신학』(分かり易くまとめたモルトマン神学)（二〇〇二）

と『모더니즘과 포스트모더니즘에 비추어 본 몰트만 신학』(モダニズムとポストモダニズムに照らし合わせて見たモルトマン神学)』(二〇〇六)、そしてモルトマン神学をキリスト教教育において実践的に適用した『몰트만 신학과 기독교 교육』(モルトマン神学とキリスト教教育)』(二〇〇七)、韓国組織神学会がモルトマン特集として刊行した『몰트만과 그의 신학…희망과 희망 사이』(モルトマンとその神学…希望と希望の間)』(二〇〇五)、そして最近刊行された『몰트만 사상과 신학의 과제』(モルトマンの思想と神学の課題)』(二〇一一)などがある。⁽⁸⁾モルトマンに関する神学者たちの研究論文は約六〇余編あり、モルトマンの政治神学、教会論、希望の神学、終末論、十字架の神学、三位一体論などを中心として、多様にその主題が取り扱われている。

3. モルトマンと韓国教会ならびに韓国神学との交流あるいは対話

モルトマンは自らの文章を通して韓国教会と神学に対する並外れた愛情をさまざまなかたちで表現しており、⁽⁹⁾ 実にもわたる韓国訪問により、韓国教会と非常に親密な関係を形成してきた。⁽¹⁰⁾ テュービンゲン大学では、彼は「코리아ファン」と呼ばれるほどに韓国を愛し、韓国の伝統芸術品をとっても愛好する人物として噂されるほどであったという。モルトマンは、韓国の教会や神学と交流する際、特定の教団に限定されず、むしろ多数の教団を結集するような包括性と開放性を見せている。彼は韓国を訪問する際、多様な教会や教団に属する神学者たちと接触し、保守的陣営・進歩的陣営を問わず、講演する機会や対談の機会を持ってきた。モルトマンは韓国を訪問する際、自らの主たる神学的諸関心を表明したが、このことは非常に時宜適切なことであつたと言えようし、韓国神学の方向設定に対しても相当大きな影響を及ぼすものであつたとも言えよう。⁽¹¹⁾

モルトマンと韓国神学との間に展開された相互交流とその対話を通じた相互理解ならびに両者の協力関係には、真に

注目に値するものがある。このことは大きく三つの流れにおいて明らかに言ったと言える。その初期には民衆神学との交流があり、一九九〇年代中盤以後は汝矣島純福音教会の趙鏞基^{チヨングキ}牧師との神学的交流が始まり、そして二〇〇〇年代以降は大韓イエス教長老会（統合）を中心とした一つの超教派的な神学的交流において著しいものがある⁽¹²⁾。

一九七五年、韓国神学大学校におけるモルトマンと韓国教会との最初の出会いは、朴鳳琅教授の招請によってかなえられた。そしてこのことは、その後のモルトマンの韓国理解と韓国人に対する愛の決定的な動因となった。当時、民衆神学者たちとの出会いを経験したモルトマンは民衆神学に注目するようになり、以後、ドイツ語で『民衆神学』（一九八四）を編集し、出版することに助力した⁽¹³⁾。モルトマンは韓国の民衆神学を世界の神学界に知らしめるための重要な役割を果たしたのである。実際、モルトマンの希望の神学と政治神学は、韓国で民衆神学の胎動に影響を及ぼすこととなったし、韓国の民主化運動に深く関与した少なからぬ人々がモルトマンの思想的影響を受け、その中の相当数の人々がモルトマンと長きにわたる交際を続け、また連帯関係を結んできたのである⁽¹⁴⁾。モルトマンはヨーロッパの神学者であるにもかかわらず、韓国の民衆神学に関心を持った理由について自らの文章の中でしばしば言及し、特に自らの神学方法論を扱った著書『キリスト教神学の道と形』（二〇〇一）に民衆神学に関する内容を載せることもした⁽¹⁵⁾。しかし、われわれが注目するのは、モルトマンが民衆神学の実践的性格を高く評価し、これに好意を表明したからといって、民衆神学を無批判に受け入れたわけではないという点である。モルトマンは「もしも、民衆がこの世を救うのであれば、誰が民衆を救うのか」という問いを提起することで、民衆神学の限界を明らかに仕方では指摘しているからである。ところで、韓国の民衆神学者たちがどの程度モルトマン神学から直接影響を受けたかという点は明瞭でない。それにもかかわらず、モルトマンと民衆神学は神学的に相互に影響を及ぼし合い、実践的次元から連帯関係あるいは同士関係にあったとは言えるであろう⁽¹⁶⁾。

一九九五年、モルトマンは汝矣島純福音教会の主任担任牧師である趙鏞基牧師と出会うことになるが、それ以後の両

者の継続的な思想的交流は、互いに大きな影響を及ぼすことになった。エキュメニカル神学者であるモルトマンと韓国で保守的陣営を代表する超大型教会の牧師、趙鏞基の出会い、非常に異例なことであるが、このことは両者の間において深い絆と神学的対話ならびに交流を産む決定的契機となった。特に「二〇〇四年靈山ヨソ国際神学シンポジウム」においては「趙鏞基牧師の希望の神学」が主題とされ、そこでモルトマンの「希望の神学」と趙鏞基牧師が伝えてきた「希望」のメッセージが、神学と牧会の領域においてどのように適用され、また表現されたかについて考察する学術講座が開催されたが、このことは重要である。このシンポジウムでモルトマンは、趙鏞基牧師の神学には「希望の神学と生命に満ちた福音」を発見したことを明らかにする。彼は、趙鏞基神学の中で展開された「三重の祝福」や「五重の福音」などに関する理解を肯定的に評価しつつも、そこに批判的に補完され、克服されるべき事柄を次のように提案した。すなわち、「カルバリーの十字架についての福音と共に、復活したキリストの意味の重要性、からだの復活を含めた全人的救いという次元ならびに被造世界を含む宇宙的な救いという次元の重要性、聖霊の賜物を異言、預言、神癒といった超自然的な贈り物としてではなく、この世の全領域に作用する未来的世界の諸力として理解する必要性、世代主義的な終末論ではなく降臨(Advent)——終末論の方向に向かう必要性」などである。⁽¹⁷⁾

ところで、驚くべきことは、二〇〇五年に趙鏞基牧師が自身の神学的変化をモルトマンに対して告白したことである。彼は自己の神学が「人間を志向する方向」から「この世を包容する方向」へと転換されるべき必要性を感じ、このことを具体的に実践していくと誓ったのである。それ以後、彼は靈魂の救いと社会の救いの実現を追求し、環境保全運動や福祉活動そして文化的働きに力を注ぐようになった。実際、汝矣島純福音教会は二〇〇八年に「愛と幸福の分かち合い財団」を設立し、これを現在まで運営してきている。⁽¹⁸⁾ このように、モルトマンは韓国教会において最多教会員数を誇る汝矣島純福音教会の最近の神学的方向や宣教に対しても、非常に大きな影響を及ぼしたということができる。もちろんモルトマンは、やはり自分も趙鏞基牧師との出会いによって自己の生と信仰において新しい体験をすることになっ

たのであり、またペンテコステ教会の神学をより深く理解するようになったことで、自らの神学的地平が広がる契機となったということを告白している⁽¹⁹⁾。

長老会神学大学校開校九周年招請講演のために来韓した二〇〇〇年以降、モルトマンは諸教団や諸神学大学校の招請によって韓国を訪問した。汝矣島純福音教会における説教や「靈山国際神学シンポジウム」への参加、プロテスタントとローマ・カトリックとの教会一致運動の一環である「キリスト者一致フォーラム」、韓国キリスト教教会協議会（NCCK）の宣教訓練院が主催した牧会者たちとの対話、生命神学協議会、新村聖潔教会^{シンチヨソソソギル}でのフォーラムなど、神学大学校や教会の現場にある牧会者たちとの出会いは、モルトマンの幅広い開放性を見せてくれるものである⁽²⁰⁾。彼のエキュメニカルな立場は、韓国人との交流においては保守的信仰であれ進歩的信仰であれ、伝統的神学であれ民衆神学であれ、韓国の全ての神学路線とキリスト者に対して、キリストの来臨と正義、平和の国の来臨に対する希望と共に、靈感を呼び込むとする彼の希望から始まるものである⁽²¹⁾。そして、モルトマン自身、韓国の神学者たちとの対話や交流を通して持続的に靈感を受け続け、そこからチャレンジを受けてきたと告白するとき、モルトマンと韓国教会との交流はきわめて肯定的かつ生産的なものとして、相互に有用な意味を持ってきたものと言えよう。半世紀にわたって、モルトマンは韓国の政治的苦難という状況に共に参与し、韓国教会のリバイバルと発展を見守りながら韓国神学が発展するための滋養分を供給する助力者ともなり、韓国のキリスト者の生き方に関心を持ちつつ愛する友としての役割を喜んで引き受けてきたのである⁽²²⁾。モルトマンと韓国神学は、二一世紀世界の神学的発展のために対話と協力を通じた建設的関係を維持していると言えよう。

Ⅲ. 韓国におけるモルトマン神学の受容と理解

1. モルトマン神学の主要な問題に対する韓国神学の受容と理解

モルトマン神学に関する韓国の神学者たちの受容と理解は、モルトマンの著書を中心に彼が提示していた神学的諸主題と共に高まった。モルトマンの神学的観点や方向設定(orientation)に対して韓国の神学者たちは絶えず関心を示し、肯定と受容、批判と反論を含めた討議過程の中で、その神学的立場を表明してきている。モルトマン神学のスペクトラムはあまりにも広く、また多様な主題を扱うため、彼の神学に対しては少なからぬ誤解や枝葉末節な部分に対する「批判のための批判」があつたことは事実である。

モルトマン神学は、彼の初期の神学に比べれば、その後徐々に韓国教会と韓国神学に対して広範囲に受容されてきた。初期の一九七〇―八〇年代は、主として基督教長老会や神学的進歩陣営において、希望の神学、政治神学、十字架の神学などが活発な仕方で受容され、また討議された。一九八〇年代以後になると、モルトマンは「神学に対する組織的寄与」(systematic contributions to Theology)を企画し、現代世界が直面する多様な問題を直視しつつ、キリスト教全体の教理を再定立するための努力をしてきた。しかし、彼が新しい著書を出版する度に、韓国では深い次元で討議が行われた。特に、モルトマンが二一世紀世界における神学的パラダイムの形成に決定的影響を及ぼした社会的三位一体論や生態学的神学、終末論、神の国を目指す公的神学〔訳注: Public Theology. 韓国では公共神学を公的神学と訳し直す流れが長神大を中心にして強まっているため、以下それにならって、publicの訳を「公的」と訳すことにする〕など

は、韓国では非常に大きな反響を呼び起こした。

大韓イエス教長老会（統合）の代表的組織神学者としてバルトの専門家であり、モルトマン神学を韓国の教会と神学界に深い次元から紹介し、これを批判的に継承しようと努力してきた金明容^{キム・ミンヨン}は、自身の論文において、モルトマン神学の貢献と論争点を次のように適切に要約している。すなわち「歴史に対する責任的な神学としての政治神学と平和神学、生と生命のためのメシア的神学、生態学的かつ宇宙的神学、理解可能な三位一体論と三位一体神学の実践性、終末論の新しい地平と万有救済論」である。筆者はこのような観点に同意しつつも、ここに「神の国を目指す公的神学」を追加し、共に論議しようとするものである。以下、モルトマンの神学思想が韓国神学によつてどのように受容され、また理解されているかについて、彼が投じた核心的な神学的問題を中心に探ってみることにしよう。

（１）歴史責任的神学としての政治神学と平和神学

かつて朴鳳琅は、『希望の神学』の出版以後、今日の神学がモルトマン神学を中心として展開されていることや、モルトマンがその先導的役割を担っていることを認める仕方、モルトマン神学を非常に高く評価した。それで、彼はモルトマンの希望の神学について、これを神学方法論とその構造における革新、神学的出発点と神学的思考ならびに神学的展望における新しさとし、これを肯定的に評価・受容する態度をとった。⁽²⁴⁾のみならず、彼は、モルトマンの著書『十字架につけられた神』（一九七二）に現れた苦難を受ける神に関する表象が、政治的不義や社会的不正からの解放というメッセージを教会が宣言すべきであることを教えるものであると力説した。実際、このようなモルトマンの神学は、韓国の民主化運動に非常に大きな影響を及ぼしたのである。⁽²⁵⁾

金明容は、モルトマンの『希望の神学』の出版が、それまでの靈魂を中心とする神学を神の国を中心とする神学へと

新しく神学的にパラダイム転換させたとし、その歴史的意義をそのようなパラダイムの転換に求める。また、モルトマンの政治神学は一九八〇年代に入ってから、平和の神学として展開されたが、このことがヨーロッパにおいては東西冷戦の壁を打ち壊し、ドイツの統一を可能ともし、そしてヨーロッパの平和を造成することに寄与したと評価する。何よりも金明容は、このようなモルトマンの政治神学と平和神学が歴史的責任的な神学として世界の神学界や全世界的な人権運動、民主化運動、平和運動などに影響を与えただけでなく、特に韓国では民衆神学の胎動に非常に大きな影響を与えたという事実を指摘する⁽²⁶⁾。また、モルトマン神学を韓国の神学界に積極的に紹介し、講義やセミナーあるいは研究を通して広く紹介することに寄与してきた李信建も、やはりモルトマンの希望の神学は終末論的希望を提示することによって、終末論的正義の実践や人間化、また人類の社会化や被造物の平和を目指す画期的なものと評価する。

モルトマンの思想は、韓国では主に民衆神学者や解放の神学者、女性神学者たちに歓迎された。特に韓国の女性神学者たちには、比較的好意的に受け入れられた。一九七〇年代後半、韓国の女性神学はモルトマンの希望の神学と十字架の神学から影響を受け、政治神学と解放の神学の影響下で神学を展開してきた。また、モルトマンの著書『聖霊の力における教会』(一九七五)は実践志向的であり、教会の更新のための多様で実際的な提案によって構成されているため、第三世界ならびに韓国においては大きな好評を得た⁽²⁷⁾。モルトマンは、世界の至る所で起こっている苦難と迫害そして真正なる人間化のための社会的、政治的運動に共に参与すべきことを主張する。このことは、韓国の進歩的陣営の教会理解に影響を及ぼすと同時に、教会とこの世という二分法に浸っている保守的な韓国教会を覚醒させ、彼らの政治的参与を迫りもした⁽²⁸⁾。モルトマンの「神の国と教会」という思想に深い影響を受けた李亨基は、このようなモルトマンの教会論に注目して、この教会論を自らの教会理解の重要な土台としている⁽²⁹⁾。

こうして、モルトマンの初期三部作である『希望の神学』、『十字架につけられた神』、『聖霊の力における教会』は、モルトマン自身の表現の通り、一方性 (onesidedness) を持った著述として韓国でも論争を呼び起こし、非常に大きな

批判を受けたのである。特に、モルトマンの希望の神学と政治神学ならびに十字架の神学は、韓国の保守的キリスト教陣営から、非常に急進的 (radical) であつて解放の神学や民衆神学の亜流だと批判されてきたのである。モルトマンは進歩的陣営から受けた歓呼と同程度に保守的陣営から疑惑の目をもつて見られてきたのであり、非常に長きにわたつて偏見と誤解を受けなければならなかったのである。このことは、モルトマンが韓国教会においてはその最初から進歩的陣営によつて偏つて紹介されてきた理由である。実際にモルトマンは、エキュメニカルな神学を志向する自らの神学がその間韓国神学界から偏狭な見方で理解されてきたことに對し、憂慮を表明することとした。彼は南米における解放の神学と韓国の民衆神学の形成に影響を与えたが、彼自身は決して解放の神学者でも民衆神学者でもないと力説した。

(2) 理解できる三位一体論と三位一体神学の実践性

現代神学において「三位一体論のルネッサンス」を主導したモルトマンは、三位一体論が形而上学的思弁の結果現れたものではなく、むしろこれは生きておられる神に関する救いの経験を通して形成された信仰告白であり、キリスト者の生に根本的な変化をもたらし得る実践的な教理であることを韓国教会に深く印象づけた。⁽³⁰⁾ 金明容によれば、モルトマンの三位一体論は、何よりも信仰者が容易に理解できる三位一体論であり、三位一体論の実践性を強調するという長所を持つものである。モルトマンは一神論的で君主神論的な西方教会の三位一体論を大きく修正しただけでなく、家庭や教会また社会や政治的領域に至るまで、世を変革させる実践的教理として三位一体論を定着させるといふ点で大きな貢献をしたと評価する。⁽³¹⁾ 様態論的傾向を持った西方教会の心理的類比 (psychological analogy of the Trinity) に傾倒している韓国教会の三位一体理解に向けて、非常に大きな衝撃をもたらしたモルトマンの三位一体論は、時として「それは三神論である」といった非難を受けることもあつたが、徐々にその価値が肯定的に高く評価されつつある。金明容は、

韓国教会と神学校において、このようなモルトマンの三位一体論を受容し、広く紹介することをもって、モルトマンの三位一体論を大衆化させた代表的な神学者である。

組織神学における特定の諸主題において、モルトマンの神学を積極的に受容し、これを自らの神学に対して忠実に適用している金均鎮は、モルトマンの三位一体論がイエス・キリストの十字架の出来事を三位一体的な出来事であるとして説明すること、すなわち教会の生き方を三位一体となられた神の働きにおいて把握し、その宣教的課題を解明する長所を持つていると主張する⁽³²⁾。李信建は、モルトマンが西欧神学の独裁論的で様態論的な一神論を排斥し、三位一体の統一性、相互間の交わりと内住、神と関係を結んだ人間の自由を強調しているとし、モルトマンの三位一体論について肯定的な評価を下している⁽³³⁾。長老会神学大学校組織神学教授の申玉秀もまた、モルトマンの社会的三位一体論が現今の三位一体論の議論において重大な意味を持つということが、伝統的三位一体論に対する批判的省察を可能にし、また種々の画期的洞察力をも提供し、聖書的に接近しようとの努力をもたらせていることを指摘しつつ、これを積極的に受容している⁽³⁴⁾。また、韓国の女性神学は、差別や抑圧を止揚する男女平等なる社会構造や職制などの根拠を提供してくれるモルトマンの社会的三位一体論を社会において実践的に適用することを強調している⁽³⁵⁾。

(3) 生と生命のためのメシア的神学

金明容によれば、モルトマンの神学はメシアとしてのイエス・キリストの人格とその働きに焦点を合わせた神学であるとして、靈魂とからだの両者を含めた全人的救いの働きと、病を癒し死の勢力を追放する解放の働きに根拠を置くものであると主張する。彼は、モルトマンの『イエス・キリストの道』(一九八九)と『いのちの御霊』(一九九一)が、まさにこのような生き方と生命のためのメシア的な神学を表していると述べる⁽³⁶⁾。金明容はモルトマン神学に基づき、正

しい神学と正しい牧会のための具体的な方案として、人間を靈魂と肉体に二分することのない全人的な神学と全人的な牧会、社会と歴史に対する神学と牧会の責任性、聖靈の力、そして祈る教会を提示する。⁽³⁷⁾ 彼は、世の生き方や生命のためのモルトマンの聖靈論ならびに靈性神学こそは、かつての靈性神学が持っていた歪曲された脱社会性や脱歴史性という問題点を矯正し、二一世紀のための正しい靈性神学の道を開いたという点で大きな価値を持つてっていると評価し、肯定的に受容するのである。⁽³⁸⁾

モルトマンの聖靈論については、韓国神学界は教派を超えて比較的に肯定的な立場を見せる。それは、モルトマンの立場がペンテコステ派教会の靈性や社会政治的解放の靈性を含めるエキュメニカルな統全的聖靈論を目指しているからである。長老会神学大学校組織神学教授である玄曜翰^{ヒョウハン}は、モルトマンの聖靈論を統全的聖靈論と規定する。モルトマンが聖靈の働きを、教会の中における多様な働きと共に社会的・政治的領域、またそのみならず今日の生態系の危機に眼を向けつつこれを宇宙的領域にまで拡大したことは、聖書的に見ても状況的に見ても妥当かつすばらしい試みである⁽³⁹⁾と見なす。申玉秀は、モルトマンが聖靈論に関して新しいパラダイム転換をもたらそうとしたことを指摘し、これを非常に肯定的に受け入れる。なぜなら、聖靈に関する実際的な次元を強調するモルトマンの聖靈論は、信仰者の生の全領域や教会共同体だけでなく、社会においても宇宙においても活動する複合的かつ躍動的な聖靈の現存と働きを理解することに有用な根拠を提供するからである。⁽⁴⁰⁾

(4) 生態学的・宇宙的神学

金明容は、モルトマンの『希望の神学』と『十字架につけられた神』が神の救いの働きに関する理解を社会と歴史に拡張させることにおいて決定的な貢献をしたと評価する。また彼は、『創造における神』ならびに『神の到来』はモル

トマン神学の生態学的特性と宇宙的特性を明らかにする著書であるとする⁽⁴¹⁾。すなわち、それらは神の救いの働きを被造世界全体へと拡大することにより、社会や歴史に対して責任を持つ神学から宇宙的次元の神学へと発展しているというのである。彼は、宇宙的キリストと宇宙的聖霊理解、宇宙的終末論から万有救済論の地平を強調する。このようなモルトマンの神学は、神の内在的超越性と超越的内在性を強調するキリスト教的万有在神論の特性を示すものである⁽⁴²⁾。

宇宙的な次元においては、モルトマンは生態学的かつ宇宙的創造論を提示することにより、キリスト教の歴史において伝統的神学によって疎外されてきた生態系の問題を神学の中心的課題として浮き彫りにし、新しい神学的代案を提供する上でのパラダイム転換をもたらした。モルトマンの弟子である郭鍾垣は、モルトマンが「自然に対する人間中心的世界観を克服し、神中心の世界観を志向する中で、人間と自然の正しい関係を模索し、神学と自然科学の対話を持続的に発展させることで、生態系の危機を克服することのできる神学的手がかりを準備した⁽⁴³⁾」と評価している。人間と自然の正しい関係を模索することと生態系の問題を解決することが急を要する韓国の状況において、モルトマンの生態学的神学は時代的にも切実に要請される神学的パラダイムを提供している。

金明容は、今日の生態学的神学の発展においてモルトマン神学は非常に重要な神学的着想と構造を提供するものであるとし、これを高く評価する。モルトマンの生態学的神学は、韓国教会と韓国神学から積極的に受容された理解されることによつて、韓国の教会と神学に非常に大きな影響を及ぼすこととなった。金均鎮は一九九〇年以後、生態系における危機に直面して、韓国教会のために生命神学を正しく打ち立てるための努力をしている⁽⁴⁴⁾。彼の大部分の著書には、生態系の危機を力説し、これに警笛を鳴らして人々の意識を高める思いを呼び起こすような強力なメッセージが込められている。長老会神学大学校組織神学教授の金道訓^{キムドフン}は『生態神学と生態的靈性⁽⁴⁵⁾』（二〇〇九）の出版などにより、生態神学に対する関心と生態的教育、生態的実践運動を拡大する働きに力を尽くしている⁽⁴⁶⁾。大韓イエス教長老会（統合）は、総会次元においてこうした生命運動に対して積極的に参与してきた。一九九一年から生命牧会実践協議会が創立さ

れ現在活動中であり、二〇一一年には、教団を超えて構成された生命神学協議会と生命神学研究所が韓国教会の生命運動を主導している。⁽⁴⁷⁾特に、韓国における女性神学は、モルトマンの生態神学に関心を置き、生態的靈性、生態的女性神学、環境運動に献身してきた。

(5) 終末論の新しい地平と万有救済論

金均鎮は、モルトマンの終末論が宇宙大的な破壊といった終末ではなく、地上に建てられる新しい天と新しい地、すなわち神の国に対する希望を宣べ伝えることにより、韓国のキリスト教界に蔓延した世代主義的終末論の限界が克服されつつあると述べる。⁽⁴⁸⁾モルトマンが、終末論を個人的終末論だけでなく宇宙的終末論にまで拡大し、統一的に終末論を扱った点については、大方肯定的に評価されている。しかし、モルトマンの終末論の中、韓国の教会と神学界において、非常に大きな波乱を引き起こした主題がある。それが万有救済論である。『神の到来』（一九九五）が出版されて以後、これは一方では古代教会のオリゲネスの思想の復活であり、異端的思想であるといった激しい批判を受け、他方ではそうした批判はモルトマンの意図が誤って伝えられたものであるといった擁護論も後に続いた。金明容は、万有救済論の肯定的あるいは否定的な側面を共に扱う反面、⁽⁴⁹⁾金道訓や崔泰永はモルトマンの万有救済論について非常に否定的な立場を取る。⁽⁵⁰⁾このことについて郭鏞垣は、モルトマンの万有救済論がイエス・キリストの福音に対する信仰無きままに死んだ者たちも救われ得るといった希望を世に与えることになると批判しつつモルトマンを万有救済論者であると貶め卑小化する批判者たちに対して、それは速断だと強く弁護する。なぜなら、モルトマンは宗教多元主義者たちとは異なり、イエス・キリストの十字架における死の意味を聖書的に正しく伝え、またキリストに対する徹底した信仰において、死者たちの救いに関する問題を考えるからである。つまり、モルトマン神学が「キリストのみ」「信仰のみ」と

いった宗教改革的神学の大前提の下で、信仰無くして死んだ者たちの救いの可能性を探るものであるという点を力説するのである。⁽⁵¹⁾

実際、モルトマンは数回にわたって、自分は宗教多元主義者ではなく、イエス・キリストを通した救いを強調している者であることを明かにしてきた。彼は宗教間の対話を強調はするが、自己の宗教的アイデンティティーを堅持しつつ、他宗教に対する理解と尊重という姿勢を持つべきだという原則を固守している点にわれわれは留意しなければなら⁽⁵²⁾ない。以上のような点において、韓国の保守的陣営から提起される「モルトマンは宗教多元主義者だ」といった非難は、適切でないものと言えよう。

(6) 神の国の神学を目指す公的神学

モルトマン神学は、始めから一貫して神の国思想に基づいた公的神学 (Public Theology) であった。モルトマンは後期に至るほど、より神の国の神学に忠実であろうとした。最近、モルトマンがこのことをより強調しているが、それは新自由主義に便乗した全世界的規模での経済的・社会的危機ならびに全地球的な生態的危機に直面して、ひとつの神学的応答を提示しようとする彼のジェスチャーである。彼の著書『世界の中におられる神——神の国のための公的神学の定立を目指して』(一九九七)⁽⁵³⁾、『神の名は正義である』(二〇〇八)、またキリスト教倫理学の著作である『希望の倫理』(二〇一〇)は、最近のモルトマンの関心を集約的に表明したものである。これは、正義・平和・生命の回復が切実に要請される二一世紀世界ならびに韓国社会の変革と癒しのための指針書とすることができる。

金明容は、モルトマンの神の国の神学が二一世紀の韓国教会が進むべき望ましい方向を提示するものであると見なす。そして、最近は公的神学の立場から樹立された教会理解を通して、政治・経済・社会・文化・環境など、生の全領

域に対する教会の責任的応答と実践的課題を力説する。つまり、教会は教会自体のためにのみ存在するのではなく、神の国という地平にあつて、神の国を建設するための責務を果たさなければならないというのである。⁵⁴⁾

李亨基は、誰よりもモルトマンの公的神学を好み、これを積極的に受容して、自らの公的神学定立のための土台としている。彼は、モルトマンの諸著書を中心とし、神の国の光から見た「教会と世」の関係を分析した後、未来志向的な神の国を公的神学の地平とするのである。⁵⁵⁾ 神の国の諸価値を人類のための社会的正義、地のための生態学的正義、また平和として理解する李亨基は、韓国教会が神の国に相応し、変革されるべき公的領域に関心を持たなければならないとし、さらに正義・平和・創造世界の保存のために神の宣教運動に参加すべきであると力説する。⁵⁶⁾ そのための具体的努力として、二〇〇九年には「公的神学と教会研究所」が彼を中心にして設立され、活発な研究と著述活動が遂行されつつあることは非常に鼓舞的なことと見なし得よう。

2. モルトマン神学が韓国教会と韓国神学に与えた傾向と意義

ここでわれわれはまず、モルトマンが韓国教会に与えた影響を探ってみよう。第一に、モルトマン神学が韓国教会のエキュメニカル運動に幅広く受容され、反映されたことである。モルトマンはWCCの信仰職制委員会 (Faith and Order) 委員としてこれに参加しつつ、世界の神学的流れを変えることに主導的役割を果たした。このことにより、モルトマンは結果的に韓国教会のエキュメニカル運動に大きく寄与することになった。実際、モルトマンは韓国の民衆神学者たちとの神学的交流を継続させながら、ヨーロッパや世界の神学界に向けて、韓国の政治的状況やこれに対応する韓国のエキュメニカル運動そして韓国の神学者たちの努力を知らせたのである。彼は、韓国の進歩的信仰はもろんのこと、保守的信仰をも包容し、民衆神学はもろん汝矣島純福音教会の宣教神学とも包括的に親密な関係を結んでいる

ことを告白する。⁽⁵⁷⁾モルトマン神学はスペクトラムが非常に広く、そのため彼は今や教派を超えて、エキュメニカルな連合を成し遂げなければならないと主張する。神学がいかにして福音的でありながら、同時にエキュメニカルなものでいられるのかということについて、モルトマンの神学が示唆することは大きいと言える。神学と理念によつて教団が分裂し、神学が対立的かつ排他的な韓国の教會的現実において、モルトマン神学は韓国の保守的な福音主義陣営と進歩的な陣営が共に論議し、互いに対話できる雰囲気を整えてくれるものとなつていると言える。

第二に、モルトマン神学が、韓国教會の実践、すなわち歴史への参与と現実変革のための運動に影響を与えたことである。第三世界の政治的・経済的抑圧という現実に対して、モルトマンは持続的な関心を示してきたが、中でも彼の神学は特に韓国社會の政治的民主化や人権運動などに影響を与えた。李信建は、次のように力説する。

モルトマンは、暗鬱な軍事独裁という時期から今に至るまで、われわれに疲れることなき希望とこの世に対する責任の生き方の根拠を提示してきた。また彼は、苦難の中にある韓国の民衆に向かつて、深い精神的連帶感を表してきた。この世と歴史に対して参与的であり、被造物の苦しみに対して敏感な彼の神学は、御利益主義「訳注・原文では「祈福主義」、末世主義、個人主義、成長主義、資本主義などに偏っている韓国教會を覚醒させるような預言者の衝撃を与えてくれたし、韓国教會をして終末論的希望の中にあつて歴史に対する責任を担い、苦難の中にあつて弟子としての道を実践し、自らを常に新たにするために、絶えず督促してきたのである。⁽⁵⁸⁾

第三に、モルトマン神学がJ-P-I-C「訳注：Justice, Peace, and Integrity of Creation」の実践、すなわち環境運動と生態神学として生態的靈性に洞察力を提供していることである。最近、諸教団が集まつて構成され出帆した生命神学協

議會、生命神学研究所の活動が注目を受けている。

第四に、モルトマンが正義と平和の実践、南北朝鮮「訳注…原文では南北韓」の和解と統一運動に寄与していることである。モルトマンは自らの経験を土台とし、分断国家である韓国社会を理解し、同時に統一に対する展望を提示し、韓国人たちを励ましてきた。彼は、韓国において統一運動に参加した人々との交わりを積み重ね、彼らに影響を与えたのである。⁽⁵⁹⁾

以上のようなモルトマンの影響力は、結局はモルトマンが目指した神の国の神学の実践へと帰結する。最近の韓国社会において深まりつつある社会的・経済的両極化と不正義の問題、政治的葛藤と環境問題、また南北の和解と統一といった諸問題を解決するために、生命と正義そして平和運動が具体的に実践されるよう、モルトマンの神学思想は二一世紀の韓国教会が進み行くべき重要な方向と神学的土台を提示している。

韓国神学界に与えたモルトマン神学の足跡を探ってみよう。第一に、モルトマン神学は韓国においてその始めからバルトを好む学者たちによって紹介され、今日も主としてバルト神学の専攻者たちや、バルトに精通した学者たちから、より積極的に受容される特性を持っている。このことは、モルトマン神学がバルト思想を創造的に継承し、またこれを批判的に克服して展開しているためであると思われる。すなわち、ここには自らの神学作業において常にバルトを対話のパートナーとし、特定の主題を扱う度にバルトとの神学的対話を続けてきたモルトマンの立場が反映しているのである。こうした脈絡から見ると、モルトマンは、最近では韓国において比較的穩健かつ中道的な学者たちによって好まれていると言えよう。

第二に、モルトマン神学は李亨基や金明容などの神学者たちによって長神大の統全的神学の形成に寄与している。⁽⁶⁰⁾大韓イエス教長老会（統合）の神学形成において核心的役割を果たしてきた金明容は、いわゆる統全的神学（Holistic Theology）の構築においてモルトマンの肯定的な貢献に注目している。⁽⁶¹⁾金明容は、統全的神学の持つ六つの特性を提

示する。それらは、三位一体の神学、完全なる福音 (the Whole Gospel)、全人性の神学、教会とこの世のための神学、宇宙的神学、神の国のための神学である。このことは、すなわちモルトマン神学の核心的特性と一致する。そして「神の国と教会」という思想ならびに終末論をもってモルトマン神学に通底するもの「訳注…原文は「常数」と理解する李亨基は、一九八五年に発表された「長神大神学声明」と一九八六年に出された「大韓イエス教長老会（統合）の信仰告白書」ならびに二〇〇一年に長老会神学大学校が発表した「神学教育声明のための基礎文書」の作成に参加したのであるが、その核心的な内容にモルトマンの思想が反映されているのである。このような文脈から、モルトマンの思想が特に大韓イエス教長老会（統合）に属する教会とその神学に深い痕跡を残していることを確認することができる。

最後に、モルトマン神学は韓国では組織神学の領域だけでなくキリスト教倫理、キリスト教教育、そして宣教学にも大きな影響を及ぼしており、そのことによって、彼の神学は実践的応用においても寄与してきた。⁽⁶²⁾ 実際、モルトマンは韓国の神学生たちに対して、他のどの神学者にも増して平易な仕方で紹介されているのみならず、彼の諸著書は神学生や牧会者たちから、絶えず最も多く読まれてきているという事実を指摘しておこう。どの時代よりも組織神学の位置が不安定になっているこのポストモダンという時代に、モルトマンがドイツの神学者であるにもかかわらず平易な文章を書くことを通して、神学を大衆化させた功績は認められるべきであろう。また、モルトマン神学は、接近するのに比較的内容な内容と論理が展開されているため、韓国の多数の組織神学者たちが彼の著書を読み、また神学的論議の過程に参加しており、さらにその神学を自らの神学に適用しているという現実がある。

ところで、韓国ではカルヴァン学会をはじめとし、バルト学会などが創立され、活発に活動が展開されている反面、未だモルトマン学会の創立は果たされていない。その間、広範囲にわたって遂行されたモルトマン研究を深化発展させるためにも、早い時期にモルトマン学会が創立されることが望まれる。それは、韓国の神学者たちの友であるモルトマンを正しく理解し、モルトマン神学をもって未来の韓国神学形成のための土台とし得る足場を作るためである。

IV. 終わりに

現今の世界の神学界において最も影響力ある学者であるモルトマンは、韓国教会ならびに韓国神学界と非常に緊密な関係を結んできた。弛まず情熱的な神学的関心と、多様にして幅広い神学的な諸主題の探求、各界各層の神学者たちとの相互的対話、積極的なエキュメニカル運動への参与を通じたモルトマンの多様で創意的、しかも建設的な神学は、現代神学における論議に対して非常に大きな貢献をしつつあり、韓国教会や韓国神学に顕著な影響を与えており、何よりも未来の神学形成のために有用な洞察と方向性を提示してくれるものである。

韓国教会では、他のどの神学者よりもモルトマンが身近に感じられており、彼の神学を受容し理解することにおいて韓国教会は積極的であった。モルトマンも同様に韓国教会を愛し、また韓国神学や韓国の神学者たちに対して並々ならぬ関心と愛情を見せてくれている。モルトマンは韓国教会を「抵抗する教会」、「民衆の教会」、「祈る教会」、「宣教する教会」と理解している。⁽⁶³⁾ 彼は長きにわたって韓国人の政治的苦難と民衆の苦しみを理解し、これに連帯した。また、彼は韓国教会の情熱と宣教、生き活きとした靈性に感動しつつ、これを自らの神学の中に受容した。モルトマンの神学は韓国の民衆神学、靈性神学、ペンテコステ神学、統全的神学などに大きな影響を与えた。モルトマンと韓国教会ならびに韓国の神学は、持続的な深い交わりと連帯を通して共に成長してきたのであり、二一世紀の世界の教会と神学のためにも、今後共に寄与することができるであろうと期待してみたい。

注

- (1) 最近、最も新しく出版された訳書は次の書である。[J. Moltmann, "sein Name ist Gerechtigkeit": neue Beiträge zur christlichen Gotteslehre, Gütersloher Verlagshaus, 2008] 하르겐 몰트만 '하느님의 이름이 정의로다 (神の名は正義である)' 관혜안 역 (郭鎭垣訳) (서울: 21세기 교회와 사회포럼, 2011) [J. Moltmann, *Ethik der Hoffnung*, Gütersloher, 2010] 하르겐 몰트만 '하느님의 윤리 (希望の倫理)' 관혜안 역 (郭鎭垣訳) (서울: 대한기독교서회, 2011)。
- (2) J. Moltmann, *Trinität und Reich Gottes: Zur Gotteslehre* (München: Chr. Kaiser Verlag, 1980); *The Trinity and the Kingdom*, trans. by Margaret Kohl (London: SCM Press, 1981); 『삼위일체와 하느님의 나라』 김관진 역 (金均鎭訳) (서울: 대한기독교서회, 1981) *Der Weg Jesu Christi* (München: Chr. Kaiser Verlag, 1989); *The Way of Jesus Christ*, trans. by Margaret Kohl (London: SCM Press, 1990); 『예수 그리스도의 길』 김관진, 김명용 역 (金均鎭, 金明容訳) (서울: 대한기독교서회, 1990) *Der Geist des Lebens: Eine ganzheitliche Pneumatologie* (München: Chr. Kaiser Verlag, 1995); *The Spirit of Life*, trans. by Margaret Kohl (London: SCM Press, 1992); 『생명의 영: 총체적 성령론』 김관진 역 (金均鎭訳) (서울: 대한기독교서회, 1992) *Das Kommen Gottes: Christliche Eschatologie* (München: Chr. Kaiser Verlag, 1995); *The Coming God: Christian Eschatology*, trans. by Margaret Kohl (London: SCM Press, 1996); 『오시느 하나님』 김관진 역 (金均鎭訳) (서울: 대한기독교서회, 1997) *Erfahrungen theologischen Denkens: Wege und Formen christlicher Theologie* (München: Chr. Kaiser Verlag, 1999); *Experiences in Theology: Ways and Forms of Christian Theology*, trans by Margaret Kohl (Minneapolis: Fortress Press, 2000); 『신학의 방법과 형식』 김관진 역 (金均鎭訳) (서울: 대한기독교서회, 2001)。
- (3) 一九七三年以来『基督教思想』誌には四〇編、『神學思想』誌には八編が収録されている。
- (4) 全景淵と朴鳳琅は、一九六四年から一九九〇年まで『福音主義叢書』三三巻の刊行をもって、世界の神学を韓国教会と神学界に専門的に紹介する重要な役割を担い、韓国神学を世界的水準へと引き上げるための核心的貢献をした。ユルゲン・

モルトマン, 『본회퍼의 사회윤리 (ボンヘッファー의 社会倫理)』 福音主義神學叢書 제 6 권, 全景淵編訳 (서울: 香隣社, 一九六九), 『神學의 未來 (神學의 未來)』 (I, II) 福音主義神學叢書 제 7 권, 제 8 권, 全景淵, 金均鎮訳 (서울: 香隣社, 一九七〇, 一九七二), 『人間: 現代의 葛藤 속에 있는 基督教人間學 (人間: 現代의 葛藤の中にある 基督教人間學)』 福音主義神學叢書 제 10 권, 全景淵, 金高光訳 (서울: 鐘路書籍, 一九七三), 『政治神學』 福音主義神學叢書 제 12 권, 全景淵編訳 (서울: 鐘路書籍, 一九七四), 『希望의 實驗과 政治 (希望의 實驗と政治)』 福音主義神學叢書 제 13 권, 全景淵訳 (서울: 鐘路書籍, 一九七四), 『하나님 體験 (神體験)』 福音主義神學叢書 제 26 권, 全景淵訳 (서울: 대한기독교서회, 一九八二), 『약한 자의 능력 (弱者의 能力)』 全景淵訳 (서울: 종로서적, 一九八六), 『聖靈의 能力 안에 있는 教會: 메시아적 教會論 (邦訳名: 聖靈의 力における 教會: 메시아적 教會論)』, 朴鳳琅ほか四人訳 (서울: 韓國神學研究所, 一九八二).

(5) 李聖禧 (도이츠居住) の他, 神學大學の教授としては金均鎮 (延世大學校引退教授), 金明容 (長老會神學大學校), 裴京植 (韓一長神學大學校), 李信建 (소울神學大學校), 柳錫成 (소울神學大學校), 金道訓 (長老會神學大學校), 郭鍾垣 (二一世紀教會と神學フォーラム) 代表) および教界においては朴宗和 (京東教會) が活動しているが, これらの學者たちの中, 金明容と柳錫成は, 現在それぞれ大學總長として在職中にある。

(6) 編集部編 『현대 신학을 이해하기 위해 꼭 알아야 할 신학자 28인 (現代神學を理解するために必ず知っておくべき神學者 二十八人)』 (서울: 대한기독교서회, 二〇〇二), 二四六—二五八頁。

(7) 이봉흠 (李奉欽), 「모트만의 사회적 삼위일체론 연구 (モルトマン의 社会的三位一體論研究)」, 『미간행서사학위논문 (未刊行修士論文)』 (서울: 장로회신학대학교, 二〇〇七), 김영환 (金永煥), 「모트만의 십자가 신학 연구 (モルトマン의 「十字架의 神學」)」, 『미간행서사학위논문 (未刊行修士論文)』 (서울: 장로회신학대학교, 二〇〇七)。

(8) 이형기 (李亨基), 『알기 쉽게 간추린 모트만 신학』 (서울: 대한기독교서회, 二〇〇二), 이형기, 『모더니즘과 포스트모더니즘에 비추어 본 모트만 신학』 (서울: 한들출판사, 二〇〇六), 임창복 (任昌福), 이형기 (李亨基) 편, 『모트만 신학과 기독교 교육』 (서울: 한국기독교교육교연연구원, 二〇〇七), 한국조직신학회 편, 『모트만과 그의 신학: 희망과 희망 사이』 조직신학논총 제 12 집 (組織神學論叢第 12 集) (서울: 한들출판사, 二〇〇五), 아신신학연구소, 『모트만 사상과 신학의 과제』 (대구: 아신출판사, 二〇一一)。

(9) 위르겐 몰트만 (ユルゲン・モルトマン), 「한국의 그리스도인들에게 (韓國의 그리스도者たち)」, 『基督教思想』 제 19 권 제

6호(一九七五)、『위르겐 몰트만, 『신학의 방법과 형식』, 二七〇—二七三頁, 위르겐 몰트만, 『몰트만 자서전(몰트만
ン自叙伝)』, 이신건·이석규·박영식 역(李信建, 李ソッキュ, 朴ヨンシク)(서울: 대한기독교서회, 二〇一一), 二五六
—二六四頁。

(10) 몰트만의 韓国訪問年度は次のとおりである。一九七五、一九七九、一九八四、一九九五、二〇〇〇、二〇〇四、二〇
〇五、二〇〇九、二〇一一。

(11) 韓国教会と韓国神学に対し、非常に時宜適切かつ顕著な影響を与えた講演の主題は、以下のとおりである。「민중의 투쟁
속의 희망(民衆闘争の中の希望)」「(一九七五)」、「성령과 생명의 신학(聖靈と生命の神学)」「(二〇〇〇)」、「희망의 신학과
생명이 충만한 복음(希望の神学と生命に満ちた福音)」「(二〇〇四)」、「그 이름은 정의…악의 희생자와 가해자를 향한 하나
님의 정의(その名は正義…惡の犠牲者と加害者に向かう神の正義)」「(二〇〇九)」、「사랑, 정의, 평화(愛、正義、平和)」
(二〇一一)。

(12) 낙운해(洛雲海)、『몰트만 신학과 한국신학(몰트만神学与韓国神学)』미간행 박사학위논문(未刊行博士學位論文)
(서울: 장로회신학대학교, 二〇一一)。

(13) *Minjung Theologie des Volkes Gottes in Südkorea* (Neukirchen, 1984) 위르겐 몰트만, 『몰트만 자서전』, 二六三頁からの再引
用。

(14) 二〇〇九年の韓国訪問の際になされた몰트만의講演は、民衆神学者であつた安炳茂博士記念事業と徐南同教授記念事
業ならびに韓國民衆神学会が共同主催したものである。

(15) 위르겐 몰트만, 『신학의 방법과 형식』, 二七〇—二八九頁。몰트만は次のように告白している。「キリスト教神学にお
ける政治的次元の發展は、私にとっては第三世界の神学者たちと同様の關係を結ぶようにしてくれた。彼らが『希望の神
学』によって靈感を受けたように、私もまた南米の『解放の神学』や韓国の『民衆神学』から様々な諸提案を受けること
となった」(R. Bauckham, *The Theology of Jürgen Moltmann* (Edinburgh: T&T Clark, 1995), ix.)。

(16) 낙운해(洛雲海)、『몰트만 신학과 한국신학(몰트만神学与韓国神学)』, 八四頁。위르겐 몰트만(ユルゲン・モルト
マン)、『하나님의 이름이 정의이다(神の名は正義である)』, 五頁。

(17) J. Moltmann, 『희망의 축복…희망의 신학과 생명: 충만한 복음(希望の祝福…希望の神学と生命に満ちた福音)』, 『2004

영산국제신학 심포지엄』(서울:영산신학연구소, 二〇〇四・六・三), 三五—四六頁。

- (18) 「愛と幸福分かち合い財団」は二〇〇八年に設立され、毎年平均して六〇億ウォン余りの予算を策定し、生計費ならびに住宅の改補修、緊急医療費の支援、心臓病の施術などを通して、貧しく疎外された人々を助けている。

- (19) 위르겐 몰트만, 『몰트만 자서전』, 四九五—四九七頁。

- (20) 二〇〇四年に監理敎神學大學校において開かれた韓國組織神學會主催のモルトマンセミナーは、こうしたエキュメニカルな對話の様子を示してくれるものだ。すなわち、そこは韓國の主要な神學大學校の敎授たちがモルトマン神學を真摯に討議する場であつたのである。

- (21) 위르겐 몰트만, 『하나님의 이름은 정의이다 (神の名は正義である)』, 四—五頁。

- (22) 위르겐 몰트만, 『희망의 윤리 (希望の倫理)』, 五頁。

- (23)김명용 (金明容), 『몰트만 (J. Moltmann) 신학의 공헌과 논쟁점 (モルトマン神學の貢獻と論争点)』, 『장신논단 (長神論壇)』 제20집 (二〇〇三・六), 一一—五頁。

- (24)박봉량 (朴鳳琅), 『위르겐 몰트만 스케치 (ユルゲン・モルトマンのスケッチ)』, 『基督教思想』 제202호 (一九七五・三), 七〇—七六頁。『오늘의 신학 사조 (今日の神學思潮)』, 『基督教思想』 제274호 (一九八一・四), 六一—七六頁。

- (25)모ルト만의著書『希望の神學』は、軍事独裁時代に獄中の人々に読まれ、その内容の一部は法廷での最後陳述において朗読されることもあったという。

- (26)김명용 (金明容), 『몰트만 (J. Moltmann) 신학의 공헌과 논쟁점 (モルトマン神學の貢獻と論争点)』, 一一七—一一九頁。

- (27)이신건 (李信建), 『신학자 몰트만—삶에서 우러나오는 신학 (神學者モルトマン—生き方からにじみ出て来る神學)』, 『基督教思想』 제606호 (二〇〇九・六), 一一—一三頁。

- (28)신옥수 (申玉秀), 『위르겐 몰트만의 교회론 (ユルゲン・モルトマンの敎會論)』, 『교회론 (敎會論)』, 한국조직신학회 편 (韓國組織神學會編) (서울:대한기독교서회, 二〇〇九), 三二—三三四頁。

- (29)이형기 (李亨基), 『하나님 나라와 교회 (神の國と敎會)』 (서울:한글출판사, 二〇〇五)。

- (30)곽혜원 (郭鎣垣), 『역자 후기 (訳者の後記)』, 『하나님의 이름은 정의이다 (神の名は正義である)』, 三二七—三三八頁。

- (31)김명용 (金明容), 『몰트만 (J. Moltmann) 신학의 공헌과 논쟁점 (モルトマン神學の貢獻と論争点)』, 一一五, 一二三—

一二九頁。김명용(金明容)、「몰트만(J. Molmann)의 삼위일체론(몰트만의三位一體論)」、『장신논단(長神論壇)』 제17집(二〇〇一・一)。

(32) 김균진(金均鎭)、「몰트만의 생애와 사상(몰트만의生涯と思想)」、『基督教思想』 제274호(一九八一・四)、一七、二七—二九頁。金均鎭は膨大な組織神学概論を著述したが、彼の思想の中にはバルトと共に몰트만의思考が至るところに溶け込んでおり、筆者の観点からすると、彼は몰트만의思想を忠実に体化(embodiment)した神学者と思われる。김균진(金均鎭)、「基督教組織神學(I—V)」(서울:연세대학교출판부,一九八四、一九八七、一九九〇、一九九三、一九九九、기독교신학Ⅰ,Ⅱ(서울:연세대학교출판부,二〇〇九)를 참고하라。

(33) 이신건(李信建)、「삶에서 우리나라 오는 신학(生き方からにじみ出て来る神学)」,一三頁。

(34) 신옥수(申玉秀)、「몰트만의 사회적 삼위일체론—비판적 대화를 중심으로(몰트만의社会的三位一體論—批判的對話を中心にして)」、『장신논단(長神論壇)』 제30집(二〇〇七)、二三—三頁。

(35) 임정현(任政赫)、「위르겐 몰트만의 사회적 삼위일체론과 양성평등(ウルゲン・몰트만의社会的三位一體論と両性の平等)」、『한국여성신학(韓國女性神学)』 제75호(二〇一一)。

(36) 김명용(金明容)、「몰트만(J. Molmann) 신학의 공헌과 논쟁점(몰트만神学の貢献と論争点)」,一一九—一二〇頁。

(37) 김명용(金明容)、「바른 신학과 바른 목회(正しい神学と正しい牧会)」、『장신논단』 제14집(一九九八)、一六二—一九一頁。

(38) 김명용(金明容)、「몰트만(J. Molmann)의 영성신학(몰트만의靈性神学)」、『장신논단』 제18집(二〇〇二)、二四九—二七五頁。

(39) 현요한(玄曜翰)、「몰트만의 성령론(몰트만의聖靈論)」、『몰트만과 그의 신학(몰트만とその神学)』,一九七—二一八頁。それにもかかわらず、玄曜翰は몰트만における聖靈の普遍的臨在と特殊な臨在の区別が曖昧であることを彼の弱点と指摘している。

(40) 신옥수(申玉秀)、「위르겐 몰트만의 성령론(ウルゲン・몰트만의聖靈論)」、『성령과 기독교신학(聖靈とキリスト教神学)』, 황승룡박사 은퇴기념집 편찬위원회 편(黃勝龍編)(博士引退記念集編纂委員會編)(서울:대한기독교서회,二〇一〇)、二四五—二四六頁。

(41) 김명용 (金明容)、『몰트만 (J. Molmann) 신학의 공헌과 논쟁점 (モルトマン神学の貢献と論争点)』、一一二—一二二頁。

(42) 신옥수 (申玉秀)、『몰트만 신학에 있어서의 만유체신론적인 비전 (モルトマン神学における万有在神論的ビジョン)』、『조직신학논총 (組織神學論叢)』 제 8집 (二〇〇三)、『몰트만 신학에 있어서 하나님의 고난 가능성 (モルトマン神学における「神の苦難の可能性」)』、『한국개혁신학 (韓國改革神學)』 제 16권 (二〇〇四)、『신옥수 (申玉秀)』、『몰트만의 창조 이해 (몰트만의 케노시스)』 (モルトマンの創造理解に現れた「神のケノシス」)、『한국조직신학논총 (韓國組織神學論叢)』 제 27집 (二〇一〇)、『신옥수 (申玉秀)』、『몰트만의 우주적 성령 이해 (몰트만における「宇宙的聖靈」理解)』、『정신논단 (長神論壇)』 제 26집 (二〇〇六)。筆者のモルトマン研究論文は、モルトマン神学全体を万有在神論的ビジョン (pantheistic vision) という観点から再解釈することにより、モルトマン神学の三位一体論的ならびに終末論的構造と特性を理解する上で平易に明瞭化したという意義を持つ。モルトマンの神学は、その初期から神論、三位一体論、創造論、キリスト論、聖靈論そして終末論に至るまで、キリスト教的万有在神論へと方向が定められており、このことがまさにモルトマン神学の核心的構造および性格を規定しているのである。このようなモルトマン神学が、伝統的有神論やプロセス神学とは区別され、第三の道を歩む建設的な試みであると肯定的に評価する筆者は、特に二一世紀の神学と科学との対話を模索する過程で、まさにこうしたモルトマンの創意的作業が有効であり、適切な神学的代案であると力説するものである。この研究は、最近に至ってモルトマン神学をキリスト教的万有在神論と理解する学会の流れが韓国では一般化したことに寄与したものと見なされる。

(43) 곽혜원 (郭鎭垣)、『역자 후기 (訳者後記)』、『하나님의 이름은 정의이다 (神の名は正義である)』、三二九頁。

(44) 김균진 (金均鎭)、『생태계의 위기와 신학 (生態系の危機と神学)』 (서울: 대한기독교서회, 一九九一)、『생명의 신학 (生命の神学)』 (서울: 대한기독교서회, 二〇一一)。

(45) 김도훈 (金道訓)、『생태신학과 생태영성 (生態神學と生態の靈性)』 (서울: 장로회신학대학교출판부, 二〇〇九)。

(46) 대韓イエス教長老會 (統合) 總會の「生命を生かす運動一〇年委員会」は、二〇〇一年以来の一〇年間、この「生命を生かす運動」に全力を尽くしてきた。また、今後一〇年は「癒しと和解の生命共同体運動」を展開していくといった展望を持っている。

(47) 金明容、李信建、金道訓などのモルトマンの弟子たちが主導的に参与し、理論的作業を活発に広げ、韓国教会の生命運動

を主導している。生命を中心とし、病と戦争、生態系の危機、貧困と死などを研究するために創立された生命神学協議会は、生命神学研究を傘下に置き、「生命神学と生命の牧会」を追求する団体である。生命神学研究所長の金明容教授は、生命が二一世紀の神学において最も重要な主題となったこと、また韓国教会は生と生命のための神学的教養を教育と実践を通して具現化して行かなければならないことを力説する。(http://cafe.daum.net/life theology)

(48) 김균진 (金均鎭)、『역자 후기 (訳者後記)』、『오시는 하나님 (神の到来)』、五七二—五七四頁。

(49) 김명용 (金明容)、『몰트만의 만유구원론과 구원론의 새로운 지평 (몰트만의 万有救済論と救済論の新しい地平)』、『장신논단 (長神論壇)』 제 16 집 (二〇〇〇・一)、『몰트만 (J. Molmann)의 종말론 (몰트만의 終末論)』、『몰트만과 그의 신학 (몰트マンとその神学)』、二四七—二七七頁。金明容は、①聖書的妥当性を獲得できるか、ということ、②死者たちに伝えられる福音の可能性と死者たちのための祈りはキリスト教の伝統と深く衝突すること、③伝道を危うくする可能性があることなど、몰트만의 万有救済論に提起され得る神学的批判の可能性を適切に指摘している。同時に、몰트만의 万有救済論を持つ神学的貢献として①万物を慰める喜びの福音という点、②信仰無しに死んだ者たちの救いの可能性をイエス・キリストに対する信仰において探し求める点、③十字架におけるキリストの死の意味を正しく伝えていく点、④バルトの万人救済への可能性を超えて、救いの領域を万物へ拡大しているという点などを挙げている。

(50) 김도훈 (金道訓)、『만유구원론에 대한 비판적 고찰 (一) (万有救済論に対する批判的考察 (一))』、『장신논단 (長神論壇)』 제 30 집 (二〇〇七)、『만유구원론에 대한 비판적 고찰 몰트만의 만물의 회복에 대한 이론을 중심으로 (万有救済論に対する批判的考察, 몰트만의 『万物の回復』についての理論を中心として)』、『조직신학논총 (組織神学論叢)』 제 22 집 (二〇〇八)、『최태영 (崔泰永)』、『몰트만의 만유구원론에 대한 통전적 이해 (몰트만의 万有救済論に対する統全的理解)』、『조직신학논총 (組織神学論叢)』 제 22 집 (二〇〇八)。

(51) 김명용 (金明容)、『몰트만 (J. Molmann)의 종말론 (몰트만의 終末論)』、『몰트만과 그의 신학 (몰트マンとその神学)』、二七〇—二七七頁。곽혜원 (郭鎭垣)、『역자 후기 (訳者後記)』、『하나님의 이름은 정의이다 (神の名は正義である)』、三三五—三三六頁。

(52) 위르겐 몰트만 (ユルゲン・モルトマン)、『신학의 방법과 형식 (キリスト教神学の道と形)』、三五—三九頁。

(53) 위르겐 몰트만 (ユルゲン・モルトマン)、『세계 속에 있는 하나님… 하나님 나라를 위한 공적인 신학의 정립을 지향하며

(世界の中におられる神…神の国のための公的神学の定立を目指して)』、곽미숙 역 (郭美淑訳) (서울…도서출판 동연, 二〇〇九)。

(54) 김명용 (金明容)、『하나님 나라의 빛에서 본 교회와 국가 (神の国の光から見た教会と国家)』、『제9회 소망신학포럼자료집 (第九回 소망신학포럼 자료집)』(서울…장로회신학대학교, 二〇〇八・一〇・八)。

(55) 이형기 (李亨基)、『하나님 나라와 공적 신학 (神の国と公的神学)』(과주…한국학술정보(주), 二〇〇九)。

(56) 이형기 (李亨基)、『벤과 몰트만의 공적 신학 비교 연구 (벤とモルトマンの公的神学に關する比較研究)』、『공적신학과 공적 교회 (公的神学と公的教会)』, 이형기 외 (서울…킹덤북스, 二〇一〇), 三一七—三一八頁。

(57) 위르겐 몰트만 (ユルゲン・モルトマン)、『하나님의 이름은 정의이다 (神の名は正義である)』, 五頁。

(58) 이신건 (李信建)、『신학자 몰트만—삶에서 우리나라 오는 신학 (神學者モルトマン—生き方からにじみ出て来る神学)』, 一五—一六頁。

(59) 위르겐 몰트만 (ユルゲン・モルトマン)、『세계 속에 있는 하나님…하나님 나라를 위한 공적인 신학의 정립을 지향하며 (世界の中におられる神…神の国のための公的神学の定立を目指して)』, 四五—四六三頁。

(60) 李亨基は自らの神学的パラ다임의變化を回顧して, 모르트만의影響に言及している. 이형기 (李亨基)、『나의 신학수업의 패러다임 이동 (私の神学の授業のパラ다임移動)』(서울…한들출판사, 二〇〇六), 三五—三九, 三九八—四四八頁. 彼はまた彼の著書『모더니즘과 포스트모더니즘에 비추어 본 몰트만 신학 (モダニズムとポストモダニズムに照らして見たモルトマン神学)』において, 모르트만神学がポスト모다니즘に対応できる適切な神学であると評価している。

(61) 김명용 (金明容)、『통전적 신학이란 무엇인가? (統全的神学とは何か)』, 이종성·김명용·윤철호·현요한 (李鍾聲·金明容·尹哲昊·玄曜翰)、『통전적 신학 (統全的神学)』(서울…장로회신학대학교출판부, 二〇〇四), 六三, 五三—八一頁. 金明容は, 모르트만을今日の世界各地の神学や神学教育に影響を与え, 神の国に向かう神学と神学教育に方向を定める道を作った統全的神学を追究する代表的의神学者と規定している。

(62) 장신근 (張信根)、『공적신학과 세계화 시대의 기독교 교육 (公的神学とグローバル時代のキリスト教教育)』, (서울…장로회신학대학교출판부, 二〇〇七), 신은정 (辛恩貞) (辛恩貞)、『공적신학을 근거로 한 기독교 학교 교육 (公的神学を根拠にしたキリスト教学校教育)』, 미간행석사학위논문 (未刊行修士學位論文) (서울…장로회신학대학교, 二〇〇八), 장순애

- (張順愛^{ジャンスンエ})、「생명성과 개방성을 통전하는 기독교 교육을 위한 연구」·몰트만의 생명신학적 교회 이해를 기초로 한 생명과 삶을 위한 교육목회의 모색(生命性と開放性を統全するキリスト教教育のための研究)·モルトマンの生命神学的教会理解を基礎とした生命と生のための教育牧会の模索」,『미간행박사학위논문(未刊行博士學位論文)』(서울:장로회신학대학교, 二〇一二), 김종복(金鍾福^{キムジョンボク})、「몰트만 신학의 종말론적 구조와 선교 연구」·전후기 종말론적 구조의 변화가 한국교회 선교에 주는 교훈(モルトマン神学の終末論的構造と宣教に関する研究)·終末論的变化が前期と後期で韓国教会の宣教に与える教訓」,『미간행석사학위논문(未刊行修士學位論文)』(서울:장로회신학대학교, 二〇〇九), 마요한(馬堯翰^{マヨハン})、「위르겐 몰트만의 종말론적 관점에서 본 윤리학의 구성에 관한 연구(ユルゲン・モルトマンの終末論的観点から見た倫理学の構成に関する研究)」,『미간행석사학위논문(未刊行修士學位論文)』(서울:장로회신학대학교, 二〇〇七)。
- (63) 위르겐 몰트만(ユルゲン・モルトマン),『희망의 신학(希望の神学)』2판(版),이신건역(李信建訳)(서울:대한기독교서회, 二〇〇二), 一一—一三頁。